

氏 名	サ ブンティ	
学 位 の 種 類	博 士 (美 術)	
学 位 記 番 号	甲 第 35 号	
学 位 授 与 日	令 6 年 3 月 12 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
論 文 題 目	猫頭倒立一頭が逆さまになった猫をモチーフとした伝統及び 既成のイメージを転換するための絵画研究	
審 査 委 員	主査 女子美術大学大学院教授	福 士 朋 子
	副査 女子美術大学大学院教授	大 森 悟
	副査 女子美術大学大学院准教授	檜 山 満 照

内 容 の 要 旨

本論文では、筆者の作品の制作過程を中心に、インスピレーションの源泉とモチーフの背後思想を探究した。作品では猫を主役として設定し、そこに中国の古典哲学である荘子の「斉物論」の解釈を加えた。その結果、「視点の転換」というテーマが生まれ、作品において猫の頭を逆さまにする発想に至った。それにより、世の中の身分、性差、地域、社会階級などに付随する伝統および既成のイメージを打破することを試みるものである。制作を通して、この世界のすべての物事には多義性・多面性があるというメッセージを表現した。たとえば、違う立場から見れば、善悪などの判断は相対的であり、絶対的な基準はない。筆者の作品によって鑑賞者が、物事の多面性に目を向けることを期待している。もし自分自身が猫になり、猫の視点で世界を観察したならばどうであろうか？その視点を逆さまにしてみたらどうであろうか？伝統および既成のイメージとは大きく異なる世界が見えてくるのではないか？そう考え、視点の転換を想起させる表現を試みて、筆者は段階的に「頭が逆さまになった猫」をモチーフにしたシリーズ作品を制作してきた。鑑賞者が自らの先入観を考え直し、新しい事実や真実を理解し、受容することを願っている。

2017 年以降、筆者は一貫して「頭が逆さまになった猫」をモチーフとしており、同時に「なぜ猫の頭を逆さまにするのか？」と常に質問されてきた。その都度、研究テーマの内容を詳細に述べたが、期待した反応を得るのは難しいことに気付いた。したがって、筆者は「頭が逆さま

になった猫」という概念をより具体化し明確にする必要があると感じ、これによりコンテンツを豊かにし、同時に「伝統および既成のイメージを転換する」というテーマをより効果的に表現できると考えた。荘子の思想をさらに深く研究することで、民間伝承や音通を組み合わせる作品の内容を充実させ、異なる表現手法や構図などを試みることで、作品のアイディアをより際立たせることができた。これにより、鑑賞者は作品から「伝統および既成のイメージを転換する」というアイディアをより直感的に感じるができるものと考えている。

本研究の目的は主に以下の三つとなる。

1. まず、作品の制作を通じて人間とは異なる視点から世界を見ることで、異なる世界を発見する可能性を探究することである。筆者は、猫の本来の姿をただ描くだけでは、「異なる視点から世界を見ること」を表象するのは難しいと考えた。そこで、頭が逆さまになった猫により、人間として見る世界とは異なる世界があるはず、というメッセージを表現する。

2. 次に、技法と構図で絶えず新機軸を打ち出す方法を通じて、伝統および既成のイメージを転換することを試みる。筆者は、既成の観念は実体があるものではなく、単一の物体でそれを表現することはできないと考えている。よって、筆者は伝統的な技法と既存の構図を通じて、世界に存在する固定概念を表象し、それを創造的に融合させることで、固定概念は変えることができるというメッセージを示す。

3. そして、「伝統および既成のイメージを転換する」というイメージをより具体化するため、単純に猫の頭を逆さまにした表現だけではなく、また別の手法を組み合わせる。先述の 1、2 をもとに、「鯉の滝登り」の伝説や「十二支」などの民間伝承と組み合わせることで、画面の内容を豊かにし、より一層メッセージが分かりやすくなることを試みる。

本論文の構成は以下の通りである。

第 1 章では、「頭が逆さまになった猫」というモチーフの形成過程、および作品の変遷を述べ、2 つの節に分かれている。第 1 節ではメインに「頭が逆さまになった猫」のモチーフの研究動機とイメージの源泉を述べている。序章で述べるように、筆者は幼少期に飼っていた猫を不慮の事故で失った。この経験により、猫に対する思い入れが深くなり、猫のかわいらしい姿に好感を抱く一方で、同時に複雑な気持ちを持ち続けている。猫は筆者にとって、「かわいい」と「恐怖」という対照的な感情を同時に抱く特異な存在であり、作品の主演として猫が選択されるのは必然の成り行きであった。また同時に、世間一般における猫に関する説話やイメージを広く収集するなかで、歴史上、猫は両義的な象徴意味を持つ動物と認識されてきたことを知り、猫を主演として設定することに迷いは生じなかった。そして筆者の個人的な経歴を踏まえつつ、荘子の「斉物論」を援用して、筆者の思考や作品への影響について述べた。筆者が 25 歳で日本に来ることを決めた時、周囲の中国人の中には結婚の適齢期であると考える人もおり、そのような伝統的な観念を持つ親戚からしばしば差別的な批判や非難を受けた。さらに、女性として

不公平な扱いも経験した。この出来事を振り返ると、一部の人は自分たちの視点から、結婚は女性にとってある特定の時期に達成しなければならないタスクとして位置付けているようだ。この世界は多様な物事から構成されたため、単一の視点や考えだけでは視野が狭くなり、それにより認識や許容範囲も狭くなってしまう恐れがある。それを避けるためには、当然ながらより幅広い視野や多視点による理解が求められる。そうした問題意識に立脚して、視点の転換を作品で表現するため、猫の頭を逆さまにする表現に至った。第2節では、猫の頭を逆さまにした最初の作品である《プリンセスの寝室》から始まり、シリーズの変遷について述べた。

第2章は2つの節に分かれている。「頭が逆さまになった猫」をモチーフにして、不吉を象徴すると信じられてきた猫と、吉祥を象徴する動物たちを組み合わせる。それを通じてイメージの転換を試みる「神獣」シリーズの制作を始めた。本章では2019年の《八駿猫》と2020年の《九猫図》の2つのシリーズを重点的に分析した。第1節では、《八駿猫》をもとに、神獣シリーズの誕生について具体的に述べた。中国の伝統的な水墨画の構図と現代の絵画技法を組み合わせ、水墨画に用いられる巻物を西洋の油絵に変え、よりユニークな表現効果を実現できた。第2節では、《九猫図》シリーズをもとに、磁器と平面作品のカテゴリーを融合する試みについて述べた。染付けなどの磁器独特の色調を平面作品の画面や主となるモチーフの創作にどのように活用したか、また合わせて、無限の循環を象徴する要素や磁器の造形を模倣した円形構図などの具体的な進展についても詳述した。

第3章は作品の継続的な研究と制作について解説し、主に2022年の《猫の滝登り》にスポットを当てて4つの節に分けて検討した。動物を主人公とする民間伝承の多くは、長い歴史の中で人々が抱いてきた共通認識や常識の形成に重要な役割を果たしており、我々が日々用いている現代の用語のあるものは、そうした民間伝承の内容をもとにしている。したがって、作品に民間伝承を取り入れることで観賞者の共感を得られる効果が見込まれ、制作の意図をより鮮明に伝えることができるものと考えた。本章では、その制作過程について検討した。民間伝承である《鯉の滝登り》の起源と変遷を整理し、古代から中世における鯉の象徴意味や先行する絵画での表現について分析した。そののち、分析結果を筆者の作品と結びつけて詳述した。《猫の滝登り》では物語性を取り入れて、伝統的なストーリーの理念をそこに融合してイメージの再創造を試みたのである。

最後の第4章では、本研究の最新の成果である2023年の《十三支・屏風》とそのシリーズについて論じた。本章は2つの節に分かれており、まず十二支に関連する民間伝承の変遷を整理したのち、その結果をもとに、筆者の作品においてコンセプトや技法がどのように融合しているのかを述べた。この作品では、固定概念を打破する試みとして、漆器の螺鈿と油絵作品の技法を融合し、主役と構図に固有の伝統的な物語と十二支の要素を取り入れた二重の新しい創造を試みた。この作品は、ある程度まで、長い歴史のなかで育まれてきた理論や伝統的な要素の

再構築が期待できるものであると筆者は考えている。特に、民間伝承に独自の新たな理解を加えることができるのではなかろうか。筆者が考える「固定概念を打破すること」は、既存の印象や表象を単純に否定することではない。それは、学習、考察、作品制作などを通じて、同じ物事の異なる側面を見出すことである。つまり、筆者の一連の研究は、新しい視点で既存の物事を再考し、イメージの再構築を試みることなのである。

結章では、これまでの4章の内容をあらためて概説し、結論を整理した。そののち、今後の研究の方向性と作品制作の見通しを述べ、期待される成果を展望した。

当初は、単に猫の頭を逆さにすることで、「異なる視点で世界を見ると、異なる世界が見える」というテーマを表現するものであった。しかし、作品を展示し鑑賞者と交流するなかで、この表現手法があまりにも単純で直接的であると感じ、さらなる深化と洗練が必要だと考えるに至った。近年の制作を通じて、筆者は「伝統および既成のイメージを転換する」というテーマを実践し続けているが、同時に、文化や言語の違いなどがもたらすコミュニケーション上の障壁や、情報があふれる現代社会でも解決できない個人の感情や認識の隔たりの問題を実感している。固定概念を変えることは、元々の認識を完全に覆すものではない。それはむしろ、自身の認識の中で新しい要素を受け入れることであり、時代と現実の変化に基づいて同じものに対する認識を更新することだと考えている。筆者は、耳慣れた象徴意味に再考を加え、構図などを工夫することで、固定化されてきたイメージを転換することを試みた。それが鑑賞者にとっても、世界の物事に対するイメージと一人ひとりの発想の転換の契機になることを期待している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

サ・ブンティの「猫頭倒立- 頭が逆さまになった猫をモチーフとした伝統及び既成のイメージを転換するための絵画研究」は、自身の起源である中国の「荘子」の思想や「音通」という文化の研究を通して自身の作品の根底にある思想や思考法、そしてこれまで制作した自身の作品を解析し表現の可能性を探る論文である。

第1章は、サが女性として受けた差別や偏見を打破し転換するための表現を模索したことによって、「頭が逆さまになった猫」というモチーフが生まれたことから始まる。論文執筆を進めるうちに、サ自身が「猫」のイメージの先入観に気づき、歴史的、地域的に猫へのイメージがどのように変化してきたのかりサーチを進めた。祖母は猫を「不吉」だとサに告げていたことから、サ自身も不吉な象徴だと信じて育った。しかし古代の中国では「吉祥」の意味を持っており、実は中国にも西洋の「黒猫」の不吉のイメージがいつの間にか入っていた

ことが実証される。そして自身の作品の中で「猫」に多義的なイメージを持たせることが可能であるという確信を得る。さらに、サの思想の根底にある「莊子」の「斉物論」の中にも、時代を経て意味が逆転していた物語を発見するなど、リサーチの範囲を広げて先入観や慣例が引き起こす差別や偏見を、自身の経験や幼少期の記憶と重ねて丁寧に確認していった。

第2章では、「八駿猫」と「九猫図」という自身の作品についてその思考法と制作過程を解説、分析する。中国の古典的絵画や図像を引用し、動物の視点から世の中を見て、しかも反転させるという発想は、サの絵画の始まりでは直感的、感覚的なものだったが、論考を進めるにしたがって、動物の頭を反転させ、さらに歴史的に生み出された神獣の身体を組み替えて描くことは、歴史的、文化的に支配者が生み出した秩序や規範を逆照射する装置として機能することにも確信を持つことになる。ここでは西洋のキメラや一般的な神獣と、自身の神獣との相違の確認も行われている。

第3章の「鯉の滝登り」の持つ意味を反転させようと描いた絵画についての論考では、中国では「鯉」に定着する以前は鯉以外の大魚のイメージが使用されていることや、様々な滝登りの図が日本でも描かれており、中国でも日本でも「音通」という「良い意味に通じる同音の別字への置き換え」による縁起の良い図像であることを確認し、音通の文化が日本でも絵画に取り入れられていることがわかる。この章では、中国の短編アニメーションの『小鯉魚跳龍門』にも触れられている。現代のメディアにも伝統的なモチーフが再現されていることが確認されて、サ自身もアニメーション的な物語を絵画に取り入れる試みを行うことになる。この論考は、本論文で重要な部分であり、古典と現代の異なるメディアを結びつけ、絵画にとどまらず表現の新たな展開を暗示する。創作にさらに新たな視点を与えるものとして「音通」の研究があり、最終的には自身の作品において実践が行われている。

第4章では、サが論文と並行して制作を進めていた「十三支」という作品について、本来の「十二支」の起源を探り、さらに作品に取り入れた「音通」の要素について丁寧に解説していく。本来は12の動物から成る「十二支」に猫を加えることでどのように従来の固定概念や先入観が転換されるのか論考を進めている。特に絵画では、5つの干支において、サ独自の解釈による音通のイメージ化を図り、現代における音通が生み出す新たな図像の可能性を示唆している。

サは、論文執筆の最初から「身分、性差、地域、社会の階級などに対する既成概念の打破を試みる」という意識を持ち続け、制作と並行して研究と執筆を行った。日本に暮らす中で、中国の古典的な図像や伝統文化に改めて興味を持ち研究対象とし、中国文化の日本文化への影響や、更に西洋文化の自身への影響などを分析した。論文執筆を進めるうちに自身の成長過程における文化的起源が複層的であり、多視点によって思考することで自身が思っている以上にその意識は世界に開かれ、強いインパクトを与えることを自覚したのではないだろう

か。審査を進める中でも、審査員は猫の持つイメージの時代的、地域的変遷、日本文化の中にも存在する音通的な表現への興味を持つこととなり、サの作品のシンプルでありながら、縦横無尽で強靱な芯を持った創造の根源を共有できたのではないかと思う。自身の作品を分析する客観的視点と制作者としての独自性を持った論文として高く評価された。